

創世記 12 章 1-9 節「主が示す地へ」

北條 輝 師（教団総主事）

アブラハム（アブラム）はイスラエル民族のルーツであり、「信仰の父」とも呼ばれて尊敬を受ける人物であるが、聖書は彼のいくつかの失敗も記録しており、決して完全な信仰の持ち主というわけではなかった。それでも、私たちはこのアブラハムの信仰から多くのことを学び、模範にすることができる。彼の信仰は素直でシンプルである。主をまことの神として認めるがゆえに、そのことばに信頼し従う信仰である。

アブラハムは神からのことばを受け、ハランを離れることになった。ハランは父親といっしょに来て移り住んだ土地であり、慣れ親しんだ土地、自分が裕福になった土地でもあった。しかし、神のことばに従い、家族やすべての持ち物を携えてハランを離れ、カナンを目指す(12:5)。彼の信仰者としての第一歩は、神のことばに従うゆえに自分の大切な場所から離れることから始まった。心配や不安がなかったわけではない。「信仰の父」にも未来は見えない。しかし、神を信じる人には、心配や不安、恐れを乗り越えさせる力が惜しみなく注がれる。

アブラハムは長旅を経てカナンに入り、モレの櫪の木のところまで来た。「モレ」とは「占うもの、導くもの」という意味であり、そこに立つ大きな櫪の木のもとでカナン人による異教の礼拝や儀式が行われていたとも考えられる。神はそんな場所でご自身をあらわし、アブラハムに祭壇を築かせた。つまり、アブラハムは異教社会のど真ん中、聖地とさえ言える場所に入って行って、神への礼拝をささげたのである。私たちは普段、異教社会の真ん中に遣わされ、人の目を気にしながら暮らしている。しかし、信仰者はそこがどんな場所であれ、そこに神への礼拝の祭壇を築くのである。神はその場所をあなたに与えると言って委ね、祝福を注いでくださる。

神はアブラハムに「あなたは祝福となりなさい」(12:2)と言われた。それは、アブラハムが神の祝福を運ぶ器となるということである。どこに行っても、誰と会っても、彼はそこに神の祝福をもたらす存在なのである。主イエス・キリストによって罪から救い出された私たちは、欠けはあっても主の器であり、主の栄光をあらわし、祝福を運ぶ働きを期待されている。神が命じる地へ出て行き、祝福を運び、自分が遣わされた場所に神の栄光をあらわしていくのである。